

環境学習セミナー報告 (第37回、第38回、第39回)

黒沢友彦 (NPO 法人自然文化誌研究会)

Memoir of the Environment Studies Seminar (37th, 38th and 39th)

Tomohiko KUROSAWA

第37回 環境学習セミナー

期日：2016年6月25日 (土)

会場：山梨県小菅村中央公民館

テーマ：山村の生物文化多様性と豊かさ～都市住民が山村住民から学びたい生業+職業=楽しみの人生～

趣旨：現在、人口700人余の小菅村では、源流の郷やエコミュージアム日本村など、村づくりの取組みが継続的になされてきました。これまでの経験の蓄積を学び直し、また、他地域の優れた経験をともに学ぶためのセミナーにしたいと思えます。大きく変わろうとする世界のなかで、このくにをどのように再創造をするのか。まずは、地域社会学と日本史の視点からの話題提供をもとに、自然と向き合ってきた山村の豊かな暮らしを再認識し、深く考えるために、親密な話し合いの場をご一緒しましょう。

参加費：資料代など1,000円 (小菅村民無料)、懇親会費3,000円 宿泊(1泊朝食)6,500円

主催：NPO 法人自然文化誌研究会、エコミュージアム日本村/ミュージーズ研究会

共催：NPO 法人 ECOPLUS

協力：東京学芸大学環境教育研究センター

後援：小菅村、小菅村教育委員会、小菅村商工会、小菅村観光協会

助成：公益社団法人国土緑化推進機構「緑と水の森林ファンド」中央事業助成

プログラム：

6月25日 (土)

12:30～ 受付開始 (小菅村中央公民館)

13:00～13:20 趣旨案内と挨拶 青柳諭 (ミュージーズ研究会代表)

13:20～14:20 『『白神学』の経験から－地域を知ること、継承すること、またそのことの難しさ?－』山下祐介 (首都大学東京・准教授、地域社会学・環境社会学)：地域を守る人とはだれなのか、誰がどういう形で、その土地の歴史や文化を継承していくのか、白神山地の山村から考えましょう。

14:20～14:30 休憩

14:30～15:30 「山の恵みに彩られた山村の暮らし」白水智 (中央学院大学・教授、日本史・山村史)：山には多くの資源があり、住民はそれを活かす多様な知識や技術をもって豊かな暮らしをしてきました。大震災に見舞われた長野県栄村 (秋山郷)における文化財を活かした復興支援活動についても紹介します。

15:30～15:40 休憩

15:40～16:40 意見交換会など

16:40～17:00 まとめ 木俣美樹男 (東京学芸大学名誉教授、民族植物学)

18:00～20:00 座談会 (広瀬屋旅館)

講演1：「首都圏から見た地方創生－人口減少社会をどう捉えるか?－」

講演者：山下祐介さん (首都大学東京・准教授、地域社会学・環境社会学)

・単著

『限界集落の真実 過疎の村は消えるか?』筑

摩書房、2012年
 『東北発の震災論 周辺から広域システムを考
 える』筑摩書房、2013年
 『地方消滅の罨 増田レポートと人口減少社会
 の正体』筑摩書房、2014年
 『リスク・コミュニティ論 環境社会史序説』
 弘文堂、2008年
 ・共著／共編著／編著
 『白神学』第1巻・第2巻、ブナの里白神公社、
 2011年・2013年
 『「原発避難」論 避難の実像からセカンドタウ
 ン、故郷再生まで』明石書店、2012年
 『人間なき復興 原発避難と国民の「不理解」
 をめぐって』明石書店、2013年
 『災害ボランティア論入門』弘文堂、2008年
 『津軽、近代化のダイナミズム』御茶の水書房、
 2008年
 『震災ボランティアの社会学<ボランティア=NPO
 社会>の可能性』ミネルヴァ書房、2002年
 『災害都市の研究—島原市と普賢岳—』九州大
 学出版会、1998年

講演2:「山の恵みに彩られた山村の暮らし」

講演者: 白水 智さん (中央学院大学教授)

・前近代山村の生業と支配のあり方

これまでの歴史学でほとんど取り上げられて
 こなかった山村地域の村について調べていま
 す。山村は今や過疎地の象徴と見なされていま
 すが、山には多くの資源があり住民たちはそれ
 を活かす多様な知識や技術をもっていました。
 山の恵みに彩られた山村の歴史的な姿を追究し
 ています。

・激甚災害時の文化財保全のあり方

2011年に大地震に見舞われた長野県栄村に通
 い、震災後に廃棄されそうになっていた古文書
 や民具を救出する活動を行ってきました。今も
 現地に通り続け、文化財を活かして文化面で復
 興を支援する活動をしています。

・主な研究実績

・著書 (単著) 『知られざる日本—山村の語る
 歴史世界』(日本放送出版協会、2005年)

・論文「山村と飢饉～信濃国箕作村秋山地区の

事例を通して～」『信濃』66-3 (2014年)

・論文「長野県栄村における文化財保全活動と
 保全の理念」、歴史学研究会編『震災・核災害
 の時代と歴史学』(青木書店、2012年)

講演1の要旨 (講演資料より):

首都圏から見た地方創生

—人口減少社会をどう捉えるか?—

山下祐介 (社会学)

1. 地方消滅から地方創生へ

・日本創生会議の増田レポート (2014年5月、
 選択と集中を含む) から端を発する。

→人口減少と東京一極集中が問題化

=>地方創生 (まち・ひと・しごと創生) へ
 (2014年9月)

・12月に長期ビジョン、総合戦略を発表

同じく問題は人口減少←東京一極集中を阻止す
 る。

だが——なぜか、地方創生の中心は「地方に新
 たな仕事づくり」に。(経済→人口)

しかも東京本部で号令して。(東京一極集中を
 東京一極集中で阻止する)

しかも競争で。自然淘汰 (選択) になる可能性
 も? (競争させて消滅?)

でないと国全体が潰れる。

これで果たして、人口減少は止まるのか? いっ
 たい何が起きているのか?

2. 人口減少社会の正体

ともあれ人口減少の正体を探ってみる・・・

①都市化要因説: まち・ひと・しごと創生長期
 ビジョン、総合戦略の前半

・東京一極集中によって、人の生まれにくい大
 都市に若い人が集まりすぎている。

→地方に若い人をとどめて子育てでできるよ
 うにしないと、この国が持たない。

↓ところが、実際にやっていることは、まず
 は地方の仕事づくり。

↓これは、

②低経済要因説: 総合戦略の後半、基本方針、
 総合戦略改訂版

・地方に仕事がないから、若い人が残らない。
だから人口が減る。まずは仕事づくり。

・ローカル・アベノミクスの推進、稼ぐ力を付ける、一億総活躍（95年基本方針、改訂版へ）

↓人口減少は高開発国の問題、東京で低出生率が問題の出発点だったのに

①と②は相容れない。事実をふまえれば①を取るべき。

・問題は経済問題ではない。社会的心理的問題。
・しかし、たしかに地方で人口減少の理由を聞くと「仕事がないから」という。

A なぜ都市で、とくに首都圏で子供は増えないのか？

B 地方に「仕事はない」は、本当か？

3. 大都市圏の暮らしと地方の仕事

(1) 都市化と出生力 ← A

・都市は仕事はあるが、暮らしとのバランスが悪い。子育てにも影響。

+

・都市化による生活の社会化＝システムへの暮らしの依存が高い→村落型の家族や共同体による問題解決方式から、公的サービスや市場利用による問題解決方式へと移行させる。暮らしの中の（家や地域での）問題解決力が低い。自分でできないので行政や市場に頼る。行政がやってくれないと問題解決できない。

↓

・ここに今、子育て支援のメニューの充実化＝家族の行政依存をさらに強化？

・だがその財源は？サービスを増やすなら負担も増やさねばならないが――

(2) 地方／農村に仕事はないか？ ← B

・仕事はある。むしろなり手がなくて困ってさえいる。→起きているのはミスマッチ

・ではどんな仕事がないのか？＝職業威信の序列が高い仕事がない。

・仕事の序列はどうやって？←中央にある仕事の方が高く、地方、農村の仕事は低い。

・国家と深く関係：国が一番上で、政令指定都市と都道府県がその次、市町村はその下。

・首都東京に近いところほど威信は高い。遠いところは威信が低い。

・この公的機関の序列に従って、企業も配列。若者も修学・就業する。

→この、国と地方の間の序列関係（これが東京一極集中の正体）を解消しない限り、地方に新しく仕事をつくっても、やっぱりその仕事の序列は低いまま。（=>地方分権）

・それどころか、本来ついてくれないと困る仕事になり手がなく、誰もがなりたい仕事にみんなが付きたがればこの国が危うい（農林漁業や、土木建築業、看護や介護など。保育士も）。

=>だがこれは、政府だけが進めてきたものでもない。国民自身が進めてきた。しかも2000年代に変化。

←世代の観点から見るとよく分かる

(3) 世代転換と2000年代

・戦前世代から戦後生まれ世代への転換期＝2000～2010年代

・戦前生まれから戦後世代への完全移行が進行中。この時、

・戦前生まれ：昔ながらの暮らしを守る。農山漁村を守る。旧来の街を守る。仕事を守る。

→職業威信よりも出自

・戦後直後生まれ：近隣都市で働き、子育て（長男・長女）。太平洋ベルト地帯へ就職（きょうだい数多い等）

→職業威信に従う

・低成長期生まれ：都市で生まれ、高等教育を得て都市で暮らせる人間に。

→職業威信に従う以外、選択肢がない？

・世代間での広域にわたる地域住み分けと仕事の分業化の結果、高齢世代ほど低い威信の仕事につき、若い世代ほどより高い威信の仕事をつくように。

・しかもバブル崩壊後、2000年代には新自由主義へ。威信の高い仕事につかないと、危ない。

・2010年代に昭和一桁が平均年齢を超える。戦前生まれ世代から戦後生まれ世代への人員交替が完了。

・それにともない、戦前世代が担ってきた仕事

を、新しい世代で埋める必要がでてくるわけだが、若い人は保身のためにも大都市・首都圏を目指す。だがそこは、仕事はあっても、子どもの産まれない社会。

・ここまで半世紀にわたって確立されてきた威信序列が、これまで安定してきた国民の職業分担に穴を空けることに。しかも悪いことに、2000年代は本来、第3次ベビーブームが起きねばならなかった時。この時の改革に子育て層が巻き込まれ、取り返しのつかない事態になった。

4. 依存と集中——少子社会と財政問題

(1) 国への依存、市場経済への依存が、不安を生み、中央へと人が集まっていく。依存と集中は、同じ現象の表裏。依存が東京一極集中を生んでいる＝過剰序列化が子供の生まれない社会へ。ただし東京も地方にすぎない。正しくは首都・大都市圏への中央一極集中（学校統廃合もそうやって起こっている）。

(2) この問題を解決するには、国民の国家・市場への過剰依存をとめねばならない。にもかかわらず地方創生は、仕事づくり、働き方改革（ただし、育児支援）、地方移住、「ふるさと納税」、専門家派遣・・・

(3) なぜこんなことになったのか？

・遡れば、2011年東日本大震災・原発事故
2000年代構造改革、2005年前後の市町村合併（このころ第三次ベビーブームがない）

↑

・でもこれは90年代初頭のバブル崩壊に起因する日本の財政難が発端なので、財政や経済に全ての目が行き、税収とその配分の（表向きの）構造から、東京は頑張っているのに地方は何をやっているんだという話になってしまったのも一応分かる。だから頑張らない一部の地域は切り捨てないと、もはや「国が持たない」ということになるのだろう。

5. 東京一極集中を問い直す

(1) 依存から自立へ？相互依存へ？

・だが、重要なことは、戦後70年を経て、この国はもはや一体だと言うこと。中心は周辺なしには成り立たないし、逆も同じ。ところが、矮小な精神で物事を見ると、中心だけで中心が成り立っているように見える？

(2) 「東京で稼いだ金を地方に融通している構造はおかしい」という誤解？

・東京は生産しているか？

・東京に集まる富の正体とは？

・東京は勝者という誤解？

・それでもなお、東京にあつまった経済＝富を地方に配分している事実は変わらないとして、その経済＝富は、東京が生み出したものというよりは、地方から東京に集めたもの（それを組みあわせたもの）だとして、この構造自体はおかしなものではない。

・人・もの・文化的資源を、地方から東京に集めることによって、東京で強い付加価値、経済力＝国力が生まれ、海外にも対抗している。

・だがこれを東京だけが頑張った結果だと思うところに病理がある（これは地方でもやはりそう思うので、若い人たちを東京に送り出そうとする）。

↓

・この構造は明治維新以来変わらない。

・格差ができて、税の再配分（とくに公共事業の配分）が、90年代まではこの地方や産業間のでこぼこを緩和し、全体としての豊かな社会を作り出していた。

・だが2000年代に矛盾が出て、これをいじった結果、かえって傷口が広がった（処方ミス？）。・そこでおかしな発想が？（競争して勝者になり、勝者になればこの国の資源にアクセスでき、生き残れる・・・）

・それでもまだ私たちは国家。この失敗を反省し、おかしな論理を修正して、今後もみんなで調整して、この国を守っていくのか。それとも、一部の人たちが、あるルールに則って勝者だと宣言し、この国の資源を独り占めするのを許すのか。だが、後者ではもはや社会でも、国でもない。

(3) やるべきことは、社会を構成する論理の立て直し

・問題は、社会的心理的問題。社会関係を切り結んでいく際の、私たちの論理の問題。

＜選択と集中＞	＜多様なものの共生＞
依存	対 自立→共依存（お互い様）
上意下達・集権	対 自治・分権
排除	対 包摂
画一性	対 多様性
この自立の主体とは？←	
×個人？→○集団？	

・ここで問題は「自立」。個人の自立を求めても自立はもはやできない。それでは切り捨ててになってしまう。求めるべきは、集団の自立地域、自治体＝国の中にある小さな国

→ 地方分権と自治、共同・協働が必要

その他、様々な回帰（『論究』第12号を参照）



・問題は、地方よりも、自治体／地域が明瞭ではない首都圏の暮らし。自分が所属している集団とは？

(4) 小さな国（地域、自治体）、新しい家（会社、集団、組織）、そして家々（各家族、家族のつながり）から、この国のあり方を問い直す。

・日々の実践が、この国を作り支えていることをもっと自覚していくこと。今の政策に欠けているものはこれであり、この自覚を取り戻すことが、人口減少社会を乗り越えていくための大きな課題になる。

[参考文献]

山下祐介『限界集落の真実 過疎の村は消えるか?』2012年、ちくま新書

山下祐介『地方消滅の罫 「増田レポート」と人口減少社会の正体』2014年、ちくま新書

山下祐介「人口減少時代における地域再生—都市と農村、中央と地方の健全な関係を再建することから」2015年『RESEARCH BUREAU 論究』第12号、38-48頁、衆議院調査局

山下祐介・金井利之『地方創生の正体 なぜ地域政策は失敗するのか』2015年、ちくま新書

講演1の要旨（講演資料より）：

「白神学」の経験から——地域を知ること、継承すること、またそのことの難しさ

山下祐介（首都大学東京／NPO法人 白神共生機構）

＜I. 白神学の経験から＞

1. 地域の概要——西目屋村砂子瀬・川原平
2. 『砂子瀬物語』の世界
3. 変動の人口学
4. 変動の社会学（1）昭和初期
5. 変動の社会学（2）戦後の変化
6. 津軽ダム移転から見えるもの

＜II. 過疎山村の再生へ＞

7. 限界集落の真実——過疎の村は消えるか？
8. 地域をあらためてつくる——基本的なことを問い直すところから

○問い直すべきこと：

- ①「地域」とは：「土」＝土地、「或」＝戈を持った口（人々）が、一（境界）を守ること。小さな国。
- ②自治体（町）は国の行政末端ではない。小さな国。他方で、
- ③住民は、境界を越えて、自由に移動。しかし、全く無秩序ではなく、定着・循環を求めている
→新しい地域・自治体像をつくる。そこから地域再生、暮らしの再生を。住民を問い直す（住民概念の再構築とともに、教育の問題）、土地を問い直す、生業を問い直す。まさに「まち・ひと・しごと」の好循環を作ることであるはず。

○集落点検の手順

- ①集落の老若男女を集め、10戸単位くらいで集落を分け、グループにする。
- ②模造紙に地図を書き、家を書き込む。各世帯の家族構成を黒で記入。
- ③さらに、出て行った家族たち（子どもたち、孫たち、弟妹たち）を赤で記入していく。
- ④黒と赤を集計。専門家に分析、講評してもらう。（=>これまでの例では、黒に対して赤の人口が意外に多く、かつ近隣都市に住んでいて、

頻繁に帰ってきている。実は町会の一部になっている人も。)

⑤この結果をふまえて、集落でできる活性化策を考える。人が戻ってくるような策は何か？
(最初は専門家・ファシリテーター必要。状況確認ができればあとは自分たちでも)

○集落点検の効果：当たり前と思っていたジリ貧観が変わる？

・[人口] 人口減？→外に、ほどほどの距離にいる。関わってもいる。潜在的な人口は現住人口の数倍いるはず。

・[生産] 農林業はジリ貧？→兼業の強さ。金銭に変えられない生産。いざという時に食いつぶれない安心感→子どもや孫たちに利用されている農山村？

・[心と文化] 都市では人から与えられる文化。文化を創るのは一握り。ここでは先祖から継承し、自ら参加することで次に伝える文化。血と肉になっている文化。

・[インフラ] 都市では一方的に与えられるインフラ。ここでは自ら関わって維持するインフラ。

↓

・かといって、10年前まではそうでも、最近はどう？自信を失ってないか？そこには世代代わりの効果も。(住民自身が都市に飼い慣らされている？)

・現状認識をただけで、各自の行動が変わることも。

・住民の点検は、メンバーシップも変える。世代間意識も醸成。

[参考文献]

山下祐介編『白神学』第1巻～第3巻

- 1 新砂子瀬物語 山村に生きる
- 2 白神への道 目屋の古道
- 3 白神のマタギ [奥目屋編]

山下祐介『限界集落の真実 過疎の村は消えるか？』ちくま新書

山下祐介『地方消滅の罫 「増田レポート」と人口減少社会の正体』ちくま新書

徳野貞雄『T型集落点検とライフヒストリーでみえる 家族・集落・女性の底力：限界集落論を超えて(シリーズ地域の再生)』農文協

第38回 環境学習セミナー

期日：2016年9月3日(土)～4日(日)

会場：山梨県小菅村役場および中央公民館、自然文化誌研究会拠点のキャンプ場(小菅村内)

テーマ：「自然と暮らす知恵と技能を学ぶ。山村の生活技能・環境学習(冒険学校)」「暮らしを創造する生きる力を生む冒険、自然体験」

趣旨：自然文化誌研究会は、秩父多摩甲斐国立公園とこの周辺にある山村で環境学習活動/冒険学校や雑穀調査研究、これらの成果を応用して、エコミュージアム日本村/トランジション小菅など、山村維持の取組みを40年あまり続けてきました。現在、精神性さえもがデジタル化されようと大きく変わりつつある世界のなかで、自然とつながるアナログ的な伝統的知識・技能が過疎高齢化によって決定的に失われようとする変曲点にあります。現実世界が仮想世界に蔽われようとするこの時代に、私たちアナログ自然・文化好きの冒険人たちはこの巨大な趨勢にどう抗うのか。自然と直に向き合ってきた山村の豊かな暮らしを再認識しながら、私たちが生活する人生を深く考えるために、親密な話し合いの場をご一緒しましょう。自然学校・冒険学校などで培ってきた経験の蓄積を学び直し、私たち市民がこのくにをどのように再創造しながら、未来に向けて実体のある生活様式をどのように維持するのか、ともに学び、考えるためのセミナーにしたいと思います。

参加費：資料代など1,000円(小菅村民無料)、懇親会費2,000円、宿泊費：キャンプ場1泊朝食(自炊)2,000円、旅館1泊朝食6,500円

主催：NPO法人自然文化誌研究会、エコミュージアム日本村/ミューゼス研究会

共催：NPO法人ECOPLUS

協力：東京学芸大学環境教育研究センター

後援：小菅村、小菅村教育委員会、小菅村商工会、小菅村観光協会

助成：公益社団法人国土緑化推進機構「緑と水の森林ファンド」中央事業助成

プログラム：

9月3日（土）

12：30～ 受付開始

13：00～13：20 趣旨案内と挨拶 中込卓男（自然文化誌研究会代表）

13：20～14：20 「暮らしを創造する生きる力を生む冒険、自然体験」佐々木豊志（くりこま高原自然学校）

14：20～14：30 休憩

14：30～15：30 「小菅村の自然、知恵と技能」木下善晴（建設業・小菅村80代）

加藤源久（自然ガイド・小菅村60代）

15：30～15：40 休憩

15：40～16：40 意見交換会（テーマ：人生が冒険でなかったら、どこに生きる意味があるのか。困難に挑戦してこそ面白い人生だ！）

16：40～17：00 まとめ 中込卓男（自然文化誌研究会代表）

18：30～24：00 夜の部（自然文化誌研究会拠点のキャンプ場：小菅村小永田地区の伝統芸能である「神代神楽」が奉納され、見学可）

9月4日（日）

8：30～11：30 伝統技能実技講習

講師：木下善晴、加藤源久

講演1：「暮らしを創造する生きる力を生む冒険、自然体験」

講演者：佐々木豊志さん（くりこま高原自然学校）

山村で自然学校を経営ながら、2008年「岩手宮城内陸地震」に遭遇して非常時の環境学習（サバイバル）の意味を、身をもって示した。さらに、この経験を活かして、東日本大震災が起こった時には、災害ボランティアセンターを立ち上げ緊急支援体制を構築した。最近、世界的にも、自然学校がいわゆる「ディズニー化」しており、冒険心まで演出されることを危惧している。幼少期の自然体験の重要性から森のようちえん、さらに自足可能な暮らしを想像するために森林資源利用から木質バイオマス、馬搬など復権と取り組んでいる。

講演2：「小菅村の自然、知恵と技能」

木下善晴さん（建設業・小菅村橋立地区）

加藤源久さん（自然ガイド・小菅村東部地区）

講演2の要旨（加藤源久さんの講演資料より）：
「小菅村の概要と自然」

1-1 どんな村か

山梨県の東北端に位置し、東京都奥多摩町に接する県境の村。東西14km、南北7km、総面積5265ha、その95%を山林が占める。村域の多くが首都を還流する多摩川の源流域にあり、一部が相模川水系となっている。村のキャッチフレーズの一つは多摩・源流で、多摩川流域市区町村との交流を村づくりの核においている。

また、全国で最も早くヤマメの人工養殖に成功した村で、「ヤマメの里」の愛称もある。現在、3軒がヤマメ、イワナ・ニジマスの養殖を手がけ、東京、埼玉方面の釣場などへ出荷している。

村の名前のいわれは、村内にイネ科の菅が多く自生しており、これを材料に菅笠を産出していたことによるといわれている。同じ小菅の地名が長野県飯山市にあり、ここも菅の産地。

1-2 村の歴史

縄文中期から後期の土器や石器などが村内の各所から出土している。年代が判明している中で最も古いのは長作観音堂で、大同2年(807年)に創建され、その後現在の地へ移されたという。現在の建物は鎌倉時代に建てられたもので、その建築様式ほかから、国の重要文化財の指定を受けている。

室町時代には、武田の家臣「小菅遠江守信景」が役場の後ろに居を構え、多摩川及び相模川水系の葛野川の源流域一帯を支配下においていた。信景は武田信玄の三代前の人。また、この頃の歌人、壬生忠峯（小倉百人一首の歌人の一人）は、「甲斐の国 鶴の郡（こおり）の板野なる しら玉こすげ 笠を縫うらん」と詠んでいる。

江戸時代は徳川幕府の直轄地で、村内の多くが御巢鷹山で、大切に森林保全がされていた。

村の人口は、明治以前は1,000人前後、大正

時代から増加し、昭和30年には2,244人とピークに達した。その後、都市への流失で人口減少が進み、平成28年9月1日現在は740人、しかも65歳以上の高齢者が45%を占める、超高齢の村となっている。

2-1 自然の特徴

村の標高は、奥多摩湖湖面の535mから大菩薩連峰の妙見の頭の2,057m。本州中部で、山地帯から亜高山帯に属し、コナラ・ミズナラ・ブナなどの落葉広葉樹を主体に、一部がシラビソ・コメツガなどの針葉樹林帯となる。首都から80km圏内にありながら、江戸時代の御用林、明治以降の水源涵養林として保全がされていたため、樹齢200年以上の巨木が多く残り、様々な動植物が見られる。

2-2 代表的な動植物

希少種としては、哺乳類ではカモシカ・ヤマネ、鳥類ではクマタカ・コノハズク・クロジ、両生類ではナガレタゴガエルが生息している。

山地帯の動植物のほとんどがみられ、鳥類は500種中115種、哺乳類は122種中30種以上、蝶類は206種中70種以上を確認している。源流域に属する小菅川に本来生息していた魚は、ヤマメ・カジカ・アブラハヤ・ウグイ・ウナギの5種で、イワナは古い時代に移植された可能性が大きい。なお、昭和32年の奥多摩湖の完成以降、下流部では魚種が大幅に増えている。

[花] レンゲショウマ・アツモリソウ・ヒカゲツツジ・カタクリ・シュンランなど

[蝶類] オオムラサキ・コムラサキ・アサギマダラ・スギタニルリシジミなど。

[魚類] ヤマメ・イワナ・ニジマス・アブラハヤ・カジカ（全域）/ウグイ・オイカワ・アユ・ハスナマズ・ヨシノボリ・ヌマチチブ・カワムツなど（下流域）

[両生類] ハコネサンショウウオ・ヒダサンショウウオ・ヒキガエル・モリアオガエル・ヤマアカガエル・カジカガエル・タゴガエル・ナガレタゴガエル・アカハライモリなど

[爬虫類] ヤマカガシ・アオダイショウ・シマヘビ・

マムシ・ジムグリ・カナヘビ、ヤモリなど

[鳥類] オオルリ・コマドリ・ヤマセミ・オシドリ・アオバト・ミソサザイ・フクロウなど

[哺乳類] クマ・サル・イノシシ・シカ・キツネ・アナグマ、タヌキ、イタチ、オコジョ、ムササビ・モモンガ・ウサギなど

・動植物の一部を写真49枚で紹介

[花] カワラナデシコ・ナツズイセン・マタタビ・トリカブト・マムシグサの実

[果実] モミジバイチゴ・クワ・オニグルミ・ミズキ

[山菜] フキノトウ・タラノメ・コゴミ

[茸] アミガサタケ・タマゴタケ（初期/中期）・シャカジメジ・コウタケ・マツタケ（初期/中期）

[蝶等] テングチョウ・アオバセセリ・ミヤマカラスアゲハ・オオムラサキ・ミヤマカワトンボ

[魚] ヤマメ・天然ヤマメ（群泳/産卵）・イワナ（産卵沢/産卵）・ニジマス（産卵）

[両生類] モリアオガエル（卵塊）・ナガレタゴガエル♂/卵塊・オタマジャクシ）・カジカガエル

[鳥] コジュケイ・ヤマセミ（巣穴）・ハシブトガラス・マガモ・ツミ幼鳥♀

[哺乳類] キツネ・疥癬病のタヌキ・サル・シカ・カモシカ

・サケ・マス類の稚魚

源流域を代表する魚がサケマス類、この仲間の大きな特徴の一つが稚魚から幼魚（10cm以内）の時期は、体側面に小判型の斑紋が見られること。この斑紋はパーマーク（和名は幼魚班）と言い、ヤマメだけは成魚になってもパーマークが見られる。サケマスの稚魚は酷似している。

イワナ→ヤマメ→ニジマスの稚魚。

・鎌倉蝶

小菅で見られる黒いアゲハチョウは、クロアゲハ・カラスアゲハ・オナガアゲハ・ミヤマカラスアゲハの4種類。

鎌倉蝶は、関東甲信越の一部地域で呼ばれていた黒いアゲハチョウの古名。鎌倉幕府の滅亡

時の争乱で6,000人以上の武士が戦死し、その直後に三浦半島一帯で大きな黒いアゲハチョウの群飛・乱舞が見られ、戦士した武士の魂の化身だという説話に由来した呼び名。小菅でも50代以上の人は「カマクラチョウチョ」と今でも呼ぶ。

ちなみに、クワガタの仲間は小菅では「ガジワラ」と呼び、鎌倉幕府の後家人「梶原景時」に由来するという。

・迷鳥と自然の変遷

翼を持つ鳥は意外な場所へも飛来する。特に台風の直後などには、海辺の鳥などが小菅も見られることがある。(釣場のポンドで泳ぐウミネコ、春の渡りの時期に金風呂に来たヤツガシラ、釣場に来たダイサギ)

昭和53年以降、小菅に住み自然の変遷を記録している。ブッポソウ・ノジコ・コサメビタキが姿を消し、トビ・カワラヒワ・アオサギ・カワウなどが進出してきた。中でもハクセキレイはここ30年で全国的に分布を広げ、小菅でも普通に見られるようになってきている。また、温暖化の影響からか、南方系のツマグロヒョウモンが普通に見られるようになってきている。皆さんも身近な自然に興味を抱き、簡単な記録を残すことを薦めます。

(第39回 環境学習セミナー)
伝統知シンポジウム
～農山村の環境と生活文化から学ぶ
都市との交流～

期日: 2017年4月15日(土)～16日(日)
会場: 神奈川県相模原市緑区(旧藤野町)の「篠原の里」

趣旨: 日本の農山村、とりわけ山間地の集落では、過疎高齢化の影響が深刻となり、長年受け継いできた自然と調和した伝統的な暮らしが消滅する寸前に立ち至っている。一方で、何百年、時には千年以上にわたって暮らしを維持してきた集落に蓄積されてきた伝統的知識体系や技能には現代的にも高い価値があり、「持続可能な社会づくり」には不可欠であることが明らかになってきている。

自然だけではなく、身近な土地からさえも切り離されて世代を重ねた都市部の住民にとっては、この知恵や技能を総合的に体験し、自らの暮らしの組み立てを考える機会を極めて有効である。自然を単に体験するだけでなく、その地に育まれた生活文化全体を題材とした都市との交流は、これからの農山村と都市住民の交流の新たな姿として探求される必要がある。

本事業では、3年次計画で実際の伝統知学習プログラム展開をしつつ、この新たな交流実践の姿を描き出す試みをしてきた。本シンポジウムでは事業成果を報告し、さらにこの成果を社会的に位置づけるために他の先進事例も紹介し、生活における伝統知や技能の大切さとその継承による、健全なライフスタイルについて、農山村と都市からの参加者ともにゆったりと話し合いたい。

幸いなことに、開催地の藤野は日本のトランジション・タウン活動の中心であり、シュタイナー学校やパーマカルチャー・センターもある。素のままの美しい暮らし(sobibo)へとライフスタイルを変容するために学ぶための良い実践が蓄積されている。これらの文化的財産をもとに、これからの私たちの生活や人生の先行きを

明るく直観できるような統合概念をともに発見し合いたい。

主催：NPO 法人自然文化誌研究会、NPO 法人エコプラス

共催：エコミュージアム日本村（トランジション小菅）／ミュージーズ研究会、トランジション・タウン藤野、トランジション・ジャパン

協力：東京学芸大学環境教育研究センター

後援：小菅村、農業生産法人藤野倶楽部、藤野観光協会

助成：公益社団法人国土緑化推進機構「緑と水の森林ファンド」中央事業助成

プログラム：

4月15日（土）

1) 基調報告

・伝統知を生かした交流と学びの場：高野孝子（早稲田大学教授）

2) 伝統知研究会報告

・苦役を学びに：太前純一（エコプラス事務局長、新潟県南魚沼市）

・伝統知～知恵と効率化：黒澤友彦（自然文化誌研究会事務局長、山梨県小菅村）

3) ポスター・セッション／話題提供

・新たな持続可能な文化の生成について：設楽清和（パーマカルチャー・センター代表）

・境界のまち「藤野」の社会的な価値：高橋靖典（トランジション・タウン藤野、藤野倶楽部）

・信州の自然と農と教育：渡辺隆一（信州大学特任教授）

4) 座談会風の総合討論・交流会

4月16日（日）

・シンポジウムのまとめと藤野まち歩き「藤野サステイナブル・スポット・ツアー」

司会：末村成生（トランジション・タウン藤野）
藤野という里山地域に根づきつつある持続可能で身の丈に合った暮らし。その具体的な営みを体感できるスポットをぶらっと見学してみませんか。パーマカルチャーやトランジション・タウンの実践現場をご案内します。

・事業について

伝統知研究会は、国土緑化推進機構の助成を受けて6年間の調査研究、普及事業を進めてきた。その成果をシンポジウムとして開催した。なお、この『都市民と農山村をつなぐ仕事と学びの創造 Creative Learning of Traditional Knowledge and Subsistence』～農山村の環境と生活文化から学ぶ都市との交流～に関する調査研究報告書も存在する。

事業名：農山村の環境と生活文化から学ぶ都市との交流～持続可能な社会を目指して

概要：日本の農山村、とりわけ山間地の集落では、過疎高齢化の影響が深刻となり、長年受け継いできた自然と調和した伝統的な暮らしが忘れられる寸前に立ち至っている。一方で、何百年、時には千年以上にわたって暮らしを維持してきた集落の技術や知識には、現代的な課題となった「持続可能な社会づくり」への示唆が豊かに残されていることが明らかになってきている。土地から切り離されて世代を重ねた都市部の住民には、この技術や知恵を総合的に体験し、自らの暮らしの組み立てを考え直す機会を極めて有効である。自然を単に体験するだけでなく、その地に育まれた生活文化全体を題材とした都市との交流は、これからの農山村と都市住民の交流の新たな姿として探求される必要がある。本事業では、実際のプログラム展開をしつつ、この新たな交流の姿を描き出す。

期間：平成26（2014）年7月から平成29（2017）年6月まで

対象区域：山梨県丹波山村、小菅村、上野原市、神奈川県相模原市緑区、新潟県南魚沼市

助成：公益社団法人国土緑化推進機構「緑と水の森林ファンド」中央事業

事業主体：特定非営利活動法人自然文化誌研究会

協力：特定非営利活動法人 ECOPLUS

伝統知研究会メンバー

・中込卓男：特定非営利活動法人自然文化誌研究会代表理事

- ・中込貴芳：特定非営利活動法人自然文化誌研究会副代表理事
- ・黒澤友彦：特定非営利活動法人自然文化誌研究会理事・事務局長
- ・藤盛礼恵：特定非営利活動法人自然文化誌研究会理事、東京学芸大学非常勤講師
- ・小柳知代：東京学芸大学講師
- ・木俣美樹男：東京学芸大学名誉教授、前・財団法人森とむらの会理事
- ・高野孝子：早稲田大学教授、前・財団法人森とむらの会理事
- ・大前純一：特定非営利活動法人 ECOPLUS 理事・事務局長
- ・阿部勉：前・財団法人森とむらの会専務理事

・伝統知について

伝統知は現代社会にいきる都市民にとってこそ重要で大切である。

学生の時（1975年～）、山梨県上野原の西原で雑穀調査を行っていた。アワ、ヒエ、キビ等様々な作物を栽培しており、中でも以前は各地でよく栽培されていたのが、その当時日本で3か所ぐらいしか残っていない幻のシコクビエを見られたのは感動であった。

なぜ西原に残っていたのか。作る人がいたからである。数人の方が作っていて、その一人は「この種子がなくなるとシコクビエは消えてしまう。わしの代でなくなすわけにはいかない。種子を採るために毎年少しだが作っている。」と語ってくれた。現在では、多くの方が栽培し、いろいろ工夫して販売までするようになった。伝統知は感動する。小正月の調査の時にモロコシの餅をいただいた。軽くサクサクした食感で非常においしかった。伝統知はおいしい。

北海道平取町二風谷で7年間（1998年～2004年）、東京近郊の小学生を中心とした参加者の「二風谷冒険学校」を約1週間行っていた時のことである。この地はアイヌの方が多く生活している。知り合いのアイヌの方をお願いしてアイヌ料理作りやこどもの山遊び、木彫り、チプサンケ祭り参加等の体験でアイヌ文化を学ぼうとすることを試みた。文字を持たぬアイヌ

民族から教わるときに、親しいアイヌはメモを取ることを嫌がった。結局、自分の体で覚えるまで繰り返し行うことが伝承者になれると感じた。教授法も様々である。異文化の伝統知を体験することは、多数派の都市民にとって必須である。伝統知は視野を広げる。

タイのウタイタニー県バンライで環境学習を教員や学生、子供たちに行う場「パンダキャンプ」に私財を投じているシリボンさんと知り合ってから（2004年～）、毎年8月にパンダキャンプで地元の小中高校生や、教員、地域の方々にワークショップを行っている。

この地域にはタイ族のほかに少数民族のカレン族、モン族、ラオ族等が住んでいる。シリボンさんと意気投合して少数民族の知恵を紹介して交流しようとして計画した。アイヌ民族の知恵を紹介し、日本から食べ物もいくつか持って行って試食してもらったり、ラオ族の筍の漬物をいただいたり、カレン族のお餅をいただいたりした。伝統知は楽しい。多様である。

午前中、子供や教員向けの環境学習プログラムをいくつか紹介し体験していただいたが、午後の少数民族の知恵を知るワークショップには、多数派のタイ族の人たちは興味を示さず帰ってしまった。日本もタイも同じように都市民にとってこそ伝統知を知ってほしいのに。

東日本大震災の後、運営委員会でいろいろ話した。結論は伝統知で生き残れる。エネルギー問題、コンピューター社会、物流、どこでも同じようなスタイル、画一的な教育・・・その中で持続可能な社会を考えると、その中心は伝統知である。

（特定非営利活動法人自然文化誌研究会 代表理事 中込卓男）

伝統知シンポジウムの要旨（報告者資料より）

・基調報告

「伝統知を生かした交流と学びの場」高野孝子さん（早稲田大学教授）

日本の農山村の多くでは、自然から持続的に恵みを取り出す知恵や、自然に近い生活から生まれる哲学や洞察が長年受け継がれてきた。近年、とりわけ山間地の集落では、過疎高齢化に伴い、そうした伝統知やライフスタイルそのものが、集落や人々とともに消えようとしている。

自然文化誌研究会とエコプラスを中心とした調査研究チームは、何百年と暮らしを維持してきた集落の技や知識には、「持続可能な社会づくり」への示唆が豊かに残されていることを前提として、都市と農村住民の交流プログラムを実施し、過去3年に渡ってデータを収集した。

それは、単なる「自然体験」ではなく、その地に育まれた生活文化全体を題材とした都市との交流であった。そうした機会を通して、参加者が伝統知についてどのような価値を見出したか、都市であれ農村であれ、持続可能な社会づくりの手がかりとなるかを考察した。

ここでは研究会の全体の報告として、幾つかのプログラムならびに調査結果の概要を報告し、見えてきた課題と可能性について言及する。

・伝統知研究会報告

「苦役を学びに」大前純一さん（NPO 法人エコプラス事務局長）

私たちが活動をさせていただく新潟県南魚沼市の山里は、4mを越す雪が積もる豪雪地帯である。冬場は毎朝のように玄関前に腰までの雪が積もり、その除雪（雪掘り）だけでもくたびれる。夏場、山の斜面に広がる美しい棚田は、田んぼよりもあぜの傾斜面の面積の方が広いといわれ、村人は6月から9月まで、あぜの草刈りに追われる。どちらも「苦役」でしかない。その雪掘りは都会の人間からすると、スキーとはまったく違ったアクティビティになる。草刈りで絵文字を描けば「草刈りアート」だ。

参加者は、体を動かし、蓄積した技を教わり、人々が何百年にもわたって積み重ねてきた暮ら

しを学ぶ。そこから改めて都市化し近代化した私たちの暮らしを見つめ直し、持続可能な未来を考える。わずか数十年しか経ていないいまの私たちの暮らしの姿をよりよくするために、改めて足もとを見直すときだ。

「伝統知～知恵と効率化」黒澤友彦さん（NPO 法人自然文化誌研究会事務局長）

「知恵」は身に付けることであると思う。小菅村に移住して12年、豊かな自然と文化、伝統的な知恵に囲まれているという実感があり、訪れる人もそう言う。自分の日常を考えると、「生業」をこなしながら暮らしている＝職業である案内人だけでなく、プレイヤーという側面もあり、正直、田舎暮らしもなかなか忙しい。だが自分自身がプレイヤーであり、身の丈に合った部分をこなしていくことは、回数を重ねるごとに自信を生み出すものでもあると思う。

自分の「生業」に関して本音を言えば、実は楽しみではない、早く片付けたいと思っているのが「生業」であったりもする。私個人の日常で言えば「生業」はこんなところ。

- ・薪割り（薪ストーブ燃料）～チェーンソー、斧の活用、保存方法、冬支度
- ・畑作～生鮮食品、穀物類の確保
- ・狩猟（趣味と義務）～山を知ること、解体作業、蛋白源の確保。副次的に、有害鳥獣駆除による森林の保全（側）

日常生活の中で大きく3つの生業を常に抱えており、これは自分自身と自然とをつなぐ接着剤。同時に、楽しみというよりはなるべく作業を効率化することにより熟練度が上がり、余暇が増える。仕事と捉えずに、仕事の合間に、日常の合間にて行うこと。

すべてに共通することは、肉体を活用することと、自然と関わることなので、健康維持という側面も持っている。健康維持を考えれば、自動的に肉体を鍛え維持すること、効率化を常に回り頭を働かせるということで知恵を磨けるという環境＝システムに包まれている。実は生業によって、伝統的な知恵の習得がなされている訳で、感謝すべきものであるということが、自

然への感謝の気持ちであろうか。

想定外の災害や、未曾有の自然災害が起きる可能性のある中、伝統的な知恵を身に付けておくことは必須であると思う。小菅村のような山村にいる限り、電気が止まろうとも、ガスがなかろうとも、命をつなぐことは可能だと思う。自分自身の手の届く範囲にエネルギーや食材が存在するからだ。農山村の伝統的な知恵を継承することや学ぶことは、農山村の維持のためではなく、生きていくための知恵を学べる場所として、ぜひ活用していただくのが農山村と都市の双方にとって良いのだろう。そして、そのようなプログラムをこれまでに展開してきた。

日常的にかかわる全ての伝統知をやりきることは難しいので、個人に必要な知恵を考え、厳選していく必要もあるだろう。

・話題提供

「信州の自然と農と教育」渡辺隆一さん（信州大学教育学部）

「みすず刈る信濃」といわれる長野県は日本の屋根である。県歌、信濃の国に詠われているように4つの平らに住む人々は豊かな自然に恵まれ農業も盛んで、豊かな自然を背景に「農」を基本とした多様な山村文化が各地に見られた。長野市の近郊でも、戸隠村は神社信仰とそばが、鬼無里村では麻や雑穀の栽培が盛んであり、ブナの森に囲まれた野沢温泉村では正月にブナのやぐらを組んだ盛大な火祭りが今でも行われている。

しかし、現代社会はこの信州においても経済発展が主題であり、自然へのまなごしは極めて少ない。私たちの生活は表面的には金銭の経済であるが、深層では地域の自然や文化を土台にしているのであり、それらを踏まえずには「持続可能な社会・地域」は成立し得ない。世界経済に遠い中山間地においては急速な過疎化が進行しており、特に子どもたちの数は減少し、全校数十人という中学が多数ある。すると小中学校が廃止されて、村は急速に過疎化する。これはやむをえないことなのであろうか。

かつての長野県の山間地では子どもが数人の

集落であっても分校などの名で小学校を維持し、学校を核とした地域が維持されていた。戦後の復興もそうした教育の力によって支えられて来たといってもよい。

環境教育を（1977年以來）永らく行ってきてわかったことは、様々な環境問題を紹介し地球の危機を訴えても個人の行動にはなかなかつながらない、心と体の成長期である小学生ほど環境に関心が高く、また危機感を持っていること、の2点である。とすれば、子どもは地域の中で遊び、大人は其中で地域の課題を提示するという共育の仕組みを再構築するしかないのではないかと思う。

近年、子どもたちの体験が重視されるようになってきたが、単に自然に触れさせるだけではなく、自然体験を地域課題として社会化することが大切である。小学生でも現地でギフチョウを見てその素晴らしさに感激するとともに、その環境や地域が開発や過疎といった社会関係の中にあることを見出し、自分たちに何ができるかを考え始める事例がでてきている。

中学年以上になれば自然や環境を論理的に見る力もあり、地域や自然を様々な関連の総体として認識できるようになる。同時に、自然も社会も文化もみな関連していることを直感的に理解できることであろう。

野外での体験は、理科学的な自然観察に終わるものではなく、確実に地域の課題学習につなげることができる優れた教材である。地域の自然を個々の自然物として見るだけではなく、その自然が育ててきた地域の暮らしと文化、そして地域の歴史、さらに人類が歩んできた進化の過程まで大きな歴史の流れとして、過去を学ぶことが、未来にどんな地域を創造してゆくのかの知恵と工夫の源泉になるのだと思う。

「新たな持続可能な文化の生成について」設楽清和さん（日本パーマカルチャーセンター）

パーマカルチャーとは持続可能な生活をベースにしながら地域コミュニティとそこに生じる文化を生成していくことを目指しています。グローバル化によって地域の文化は自然

とともに破壊され、人は自らのアイデンティティの拠り所と、生活の安定を失ってしまいました。地域の特性とそこに生きる人々の地域の資源を用いて生活のレベルを高めていく創造力により築かれてきた文化の街を見直し、それらが内包する様々な知恵や技術を未来に向けて生かしていくことが、これから私たちが取り組むべきことであると考えます。

パーマカルチャーを通して見いだすことができるこれらの文化の様々な特性を明らかにするとともに、これらを生かして地域づくりを行っていく実践についての報告を行いたいと思います。

「境界のまち〈藤野〉の社会的な価値」高橋靖典さん（トランジション藤野・農業生産法人藤野倶楽部）

藤野は首都圏からみると、車でも電車でも約1時間～1時間半。都内で仕事を持っていても、なんとか通勤ができる場所に位置しています。地形としては中山間地域であり、平地の少ない山間の地域で、大規模な農業をするには不利な場所です。移住や経済という視点からこの地域を見た場合には、本当に奥まった田舎までは移住できないケースで、消費地でもある首都圏とのつながりも持った上で暮らせるエリア、自然の多い田舎エリアへの境界線のまちとも言えるのではないかと考えています。そんなまちで考えられる役割と取り組みについてお話しさせていただきます。

・藤野現地ツアー案内

小山宮佳江さん（NPO 法人トランジション・ジャパン共同代表／トランジション藤野メンバー）

末村成生さん（トランジションタウン藤野お百姓クラブ）

(資料) 農山村の暮らしの幸せな暮らしと生業

生業（なりわい）とは・・・『農山村から幸せな暮らしを創る地道な仕事、理論を導くのは実践であり、実践を確認するのは理論である。（仕事の理屈）』

ここでは、調査対象となった各地域の生業などを紹介する。

- ①エコミュージアム日本村～源流の郷・小菅村
- ②長寿村の文化遺産～上野原市西原・桐原
- ③トランジション・タウン藤野、農業生産法人藤野倶楽部～相模原市緑区
- ④豪雪とお米～南魚沼市栃窪集落、清水集落

①エコミュージアム日本村～源流の郷・小菅村



モロコシ（あかもろ）の栽培



キビと里芋の栽培



ウズラマメ（ひよっと）の在来品種



畑で談笑しながら今年の作物の情報をもらう



雑穀栽培講習会の開催



エコミュージアム
日本村



炭焼き窯の手伝い



窯から炭を出して計量、箱詰めをする

②長寿村の文化遺産～上野原市西原・柵原



地元住民と交流しながら学ぶ



水車を使つての搗精作業



地区で管理・使用される現役の水車



地元の食材が集められ販売されている

③トランジション・タウン藤野・農業生産法人藤野倶楽部～相模原市緑区



藤野居住作家たちによる陶器市の開催



地元住民、移住者や観光客でにぎわう



トランジ・ションタウンの活動が盛ん、藤野倶楽部にはローカル・シードバンクと専門書庫を置く